

第 221 次調査



Ph.1 第221次調査区全景（南東から）

遺跡略号 ART-221
調査番号 0549

例 言

1. 本報告（本書『有田・小田部47』のうち「第221次調査」）は、福岡市教育委員会が、早良区有田1丁目31番において平成18（2006）年1月6日から同年1月20日まで発掘調査（本調査）を実施した、共同住宅建設に伴う有田遺跡群遺跡第221次調査の報告書である。なお、個人による事業を原因とする調査であり、かつ調査期間が短期間であったため、発掘調査費用は国庫補助金を適用している。また、本調査に先立って行われた同敷地内の確認調査についても本報告で記載している。
2. 遺構の呼称は記号化し、柱列・ピット列をSA、土坑をSK、性格不明遺構（窓穴状・土坑状）をSX、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、柱穴および性格不明のピットをSPとしている。また遺構番号は、調査時における番号をもとに一部整理し、修正して報告している。
3. 本報告の遺構実測図に用いる標高は、有田地区に福岡市教育委員会埋蔵文化財課が設置した測量基準杭上の水準高から移動している。調査区の座標は任意である。各遺構図の方位北は国土座標北である。調査区の国土座標上の位置は、上記の有田地区に設置されている測量基準杭より測量して求めている。なお、国土座標は日本測地系（第II系）である。ただし、巻末に掲載した抄録の座標系は世界測地系による。
4. 本報告に用いる遺構実測図は、主に久住猛雄（当時、埋蔵文化財課）が作成し、確認調査時の遺構図作成は阿部泰之、今井隆博（当時、埋蔵文化財課）の協力を得た。遺物実測図の作成者は以下の通りである。土器・陶磁器は主に西堂将夫（埋蔵文化財調査技能員）が、一部を西拓巳（福岡大学大学院）が実施した。石器・石製品は平之内武史（もと別府大学大学院）が実測した。拓本採取は西拓巳が行った。遺構図・遺物実測図の製図は、宇野美嘉、成清直子（以上、整理作業員）、西拓巳、および久住が行った。
5. 本報告に用いる遺構写真は久住が撮影した。使用した写真是、35mmカメラおよび6×7判カメラを用いた白黒フィルム撮影である。本報告では用いていないが、カラーリバーサルフィルムによる遺構写真撮影も行っている。
6. 本報告の編集・執筆は久住（埋蔵文化財第1課）が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

調査基本情報

遺跡名	有田遺跡群	調査次数	221次	調査略号	ART-221
調査番号	0549	分布地図範囲名	82. 原	遺跡登録番号	0200309
事前審査番号	17-2-241	調査原因	共同住宅建設(切土造成)	敷地面積	768.00m ²
調査期間	平成18年(2006年)1月6日～同年1月20日(本調査)	申請工事面積	61.75m ² (切土部分)	調査面積	59.17m ²
調査地	福岡市早良区有田1丁目31番5				

1. 調査に至る経緯

平成17年6月15日付けで、松尾良行氏より福岡市早良区有田一丁目31番5地内における2階建て共同住宅の建設工事について、文化財保護法に基づく工事の事前届出が福岡市埋蔵文化財課に提出された（事前審査番号17-2-241）。申請地周辺は有田遺跡群として周知されている埋蔵文化財包蔵地であり、申請地が周囲道路面より一段高く旧地形を留めているとみられることや、周囲のそれまでの調査成果から、申請地にも比較的浅い深度に埋蔵文化財が存在する可能性が高いと考えられた。そのため、現地における確認調査（試掘調査）を行うことになった。確認調査は平成17年9月28日に行われ、その結果、表土直下のGL-15cmというきわめて浅い深度で遺構を検出した。この結果を受けた当初の協議では、予定される建物の範囲については基礎工事の掘削が浅いため、工事対象範囲に盛土をすることで遺構への影響を回避するという設計変更を行い、慎重工事として発掘調査は行わないものとした。しかしながら、付帯工事として行われる駐車場（車庫）造成などの外構工事は地形の切り下げを伴うものであり、遺構への影響が不可避であることから、この切土造成部分についての発掘調査が必要であると判断された。関係者との協議の結果、発掘調査の実施について合意が得られ、平成17年10月31日より発掘調査を開始することになった。

発掘調査開始前の10月27日には、関係者とともに事前協議を行った。ところが、設計変更により基礎掘削工事が遺構面に影響を与えない予定であったはずの共同住宅工事範囲について、工事により遺構面の多くを露出し、さらに一部を若干ながら削平してしまっていることが判明した。発掘調査予定範囲についても、工事側の都合により廃土や建設機材が置かれたままであり撤去も未定ということが判明した。したがって10月末からの発掘調査の開始は困難な状況であることが確認された。こうした現地の状況を受け、埋蔵文化財課と工事関係者との間で再度の協議を行った。まず遺構面が露出し、一部削平状況にある共同住宅建設範囲については、工事の一時的な中断を要請し、工事の影響が遺構に及ばないように、再度の工事設計の変更を求めるようになった。それとともに応急的な措置として、現状で確認される遺構の分布調査（確認調査）を行うことになった。これは、周囲に「早良都衙」などの重要遺構の分布が推定されることも考慮に入れた上での措置である。確認調査は平成17年10月31日に行った。切土造成工事が予定され、当初より発掘調査が必要と判断されていた範囲の本調査の開始については、一旦は延期することとし、要調査範囲の機材等の撤去など工事側の工程についての再度の確認と調整を要請した。このような経緯により関係者との協議が継続され、その結果、平成18年1月6日より発掘調査を行うことで最終的な合意を得るに至った。

発掘調査（本調査）は平成18年1月6日から同年1月20日まで行った。また、整理作業と報告書作成については、平成21年度に行っている。

2. 調査の組織（平成17年度：本調査年度、平成21年度：整理・報告年度）

調査委託 松尾良行

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子（平成17年度）、山田裕嗣（平成21年度）

調査總括 文化財部埋蔵文化財課 課長 山口謙治、調査第1係長 山崎龍雄（平成17年度）

埋蔵文化財第1課 課長 濱石哲也、調査係長 米倉秀紀（平成21年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係 松浦一之介（平成17年度）

調査担当 久住猛雄（本調査時：埋蔵文化財課調査第1係、整理・報告時：埋蔵文化財第1課調査係）

庶務担当 文化財整備課管理係 鈴木由喜（平成17年度）、文化財管理課 山本朋子（平成21年度）

なお本調査にあたっては、寒空の中、発掘作業員の方々の協力を得た。確認調査時においては、吉留秀敏、阿部泰之、今井隆博（いずれも当時、埋蔵文化財課）の助力を得た。現場における構造実測では、上野道郎、金子由利子（発掘作業員）の助力を得た。遺物実測図の作成では、西堂将夫（技能員）、平ノ内武史（もと、別府大学大学院）の協力を得た。その他、発掘調査の条件整備などにあたっては、委託者および大東建託株式会社の担当者の方々にご協力いただいた。これら関係各位の方々には、特に記して感謝申し上げたい。



Fig.1 有田遺跡群221次調査地点の位置 (1/25,000)

3. 調査地点の位置と立地

221次調査地点は、早良区有田1丁目31番5に所在し、有田遺跡群中央部最高所の西側にあたる (Fig.1)。周囲では133次、95次、181次、188次、107次などが調査されており (Fig.2・3)、8世紀以降の「早良郡衙」に関連する建物（倉庫）群および柵列や溝による方形官衙区画や、これに先行する6～7世紀代の柵列方形区画と掘立柱建物（「那津官家」の一部との説もある）をはじめ、弥生時代初頭～前期の環濠

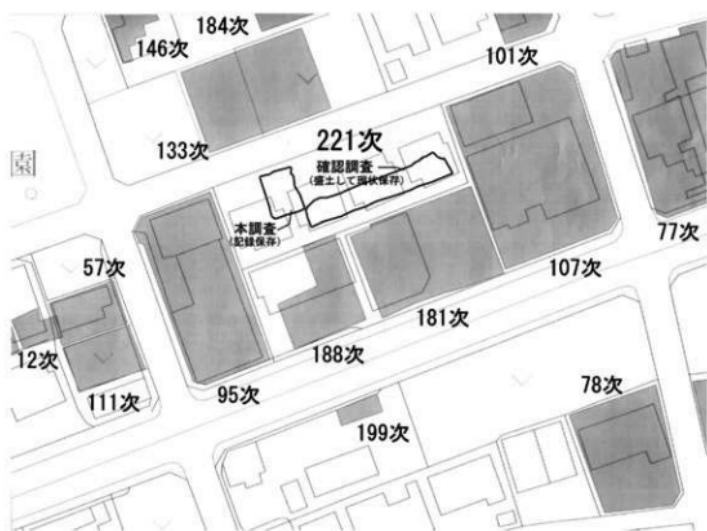


Fig.2 有田221次調査の位置と周辺の調査地点 (1/1,000)

や貯蔵穴（本調査地点は環濠推定範囲の内側にある）、古墳時代前期～中期の整穴住居や土坑（中期には初期須恵器や陶質土器・韓式系軟質土器を伴う場合が多い）、中世の屋敷群など、幅広い時期の多様な遺構と遺物が検出されている。調査地は、周囲道路より一段高い宅地であるが、若干の削平はあるものの段丘地形を残している。北側前面道路の標高は、西側が12.6m、東側は12.8m前後を測るが、調査対象地は（Fig.4）、東側の確認調査対象部分（遺構は盛土して保存）の周囲は13.4～13.8m、西側の本調査部分は道路側が12.8m、南側が13.6～13.8mの標高となっている。

4. 調査の記録

（1）調査の概要（Fig.4・5）

確認調査部分は、GL-10cm未満の表土直下でローム地山上面が露出し、遺構が確認できる状況であった（Ph.9・10）。切土造成工事が予定され本調査を実施した部分では、南側は表土・盛土層を除去したGL-30cm前後（Fig.7）で地山上面となり、地表面が下がる北側（道路側）ではGL-30～50cmで地山上面ないし遺構覆土上面となり（Fig.6）、遺構を検出することができた。北側に向かって削平が顕著になっている状況であった。なお表土掘削は重機で行ったが、廃土置場が確保できため調査区の反転などはしていない。

本調査は、1月6日の重機掘削による表土掘削から開始した。同日に機材を搬入した。1月10日に現場設営を行い、遺構検出を開始した。大溝と思われる遺構が認識されたので、この上部の掘削を開始した。1月15日までに遺構の掘削が進み、遺構図の作成を開始した。1月17日までに大部分の遺構を掘削し、同日に全体を清掃して全景を撮影した。その後、1月19日までは遺構図作成を主に行い、遺構掘削の補足と遺物洗浄を平行して行った。1月19日に機材を撤収し、20日に廃土を重機で埋め戻して本調査を終了している。

掘削は表土のみ重機で掘削し、残りは人力で行ったが、大溝の掘削は作業員数と期間的には辛く厳しいものであった。記録作業は、調査区に任意座標系の杭を設置し、これを基準として2mないし1mごとの水糸メッシュを張り、1/20の遺構平面図を作成した。その他、土層断面図などを作成した。調査区と敷地範囲は、光波測量機による座標測定で1/100平面図を作成した。なお、先立って行われた確認調査時の遺構分布図は1/100の平板測量による。レベルと国土座標（日本測地系第II系）は、有田跡群周囲に教育委員会埋蔵文化財課が設置している測量基準杭から移動して求めている。

本調査で検出した遺構は、溝状遺構5条とピット群である。調査区の大半を占める幅広い溝で、東側に肩部があるSD01と、その大溝の中央部落込み（調査区西端を走行）であるSD03を便宜上分けているが、周囲の調査状況から一連の大溝と考えられる。SD03の東側肩部には同一方向SD04、SD01下部に小溝SD05があるが、いずれも浅い。SD01の底面には、SD04とSD05の間を中心にしてピット状の凹みが密集して検出されている。SD01の外側、調査区の南東隅には、SD01やSD03と方位が類似するSD02がある。SD02周囲の検出面は高く残っており、古墳時代～中世と考えられるピット（柱穴）を少數検出した。確認調査部分については、本調査の遺構説明の後で概要を報告する。

出土遺物の総量は、パンケース2箱程度である。中世～近世の土器・陶磁器類が主体をなすが、弥生時代～古代の土器もある。また、弥生時代の剥片石器類（黒耀石）、中～近世の石製品も出土した。なお、本調査部分の面積は59.17m²である。

（2）検出遺構

SD01・SD03（Fig.5～8）

調査区の大部分を占める大溝である。現状で幅5.6mであるが、SD03は溝中央で深くなる部分と見られ、これを軸として西へ折り返すと本来の溝幅は12m以上となる。SD04とSD05はこの溝の一部

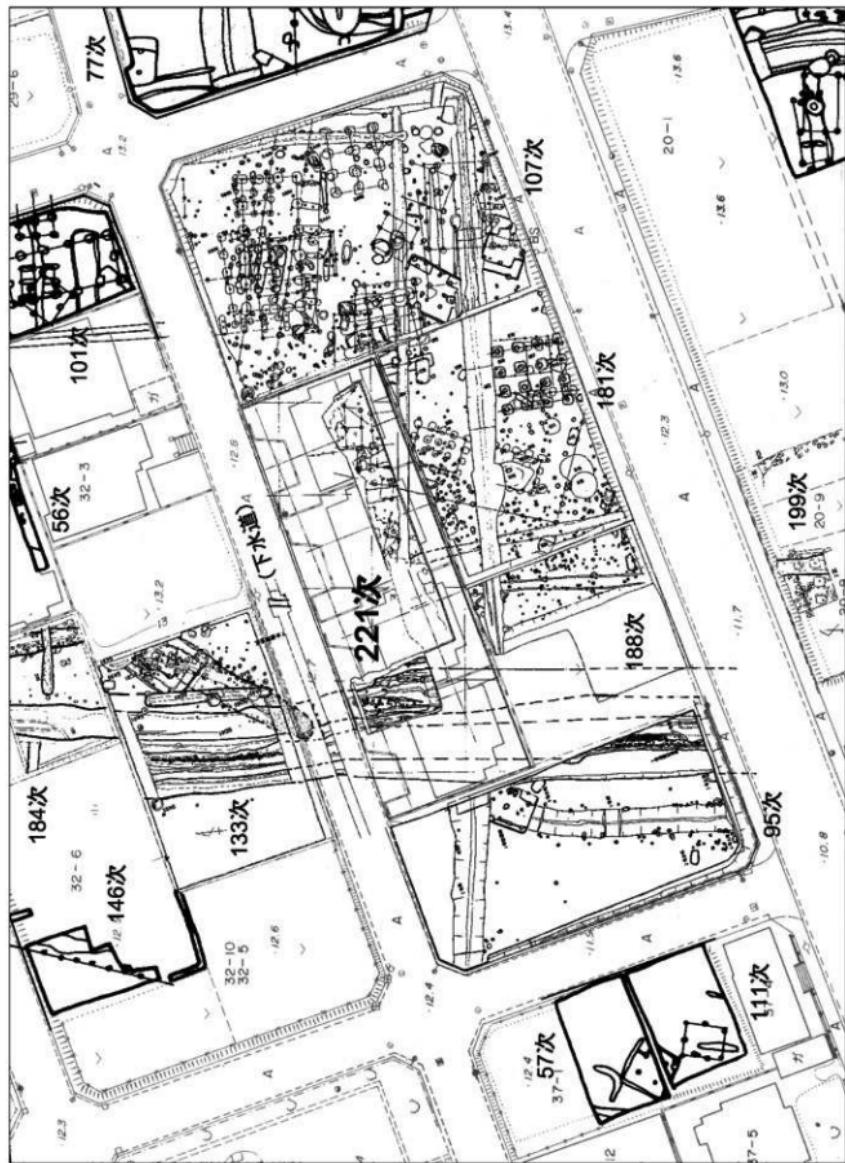


Fig.3 有田221次調査と周囲調査の遺構分布 (1/500)

*左が北

第221次調査

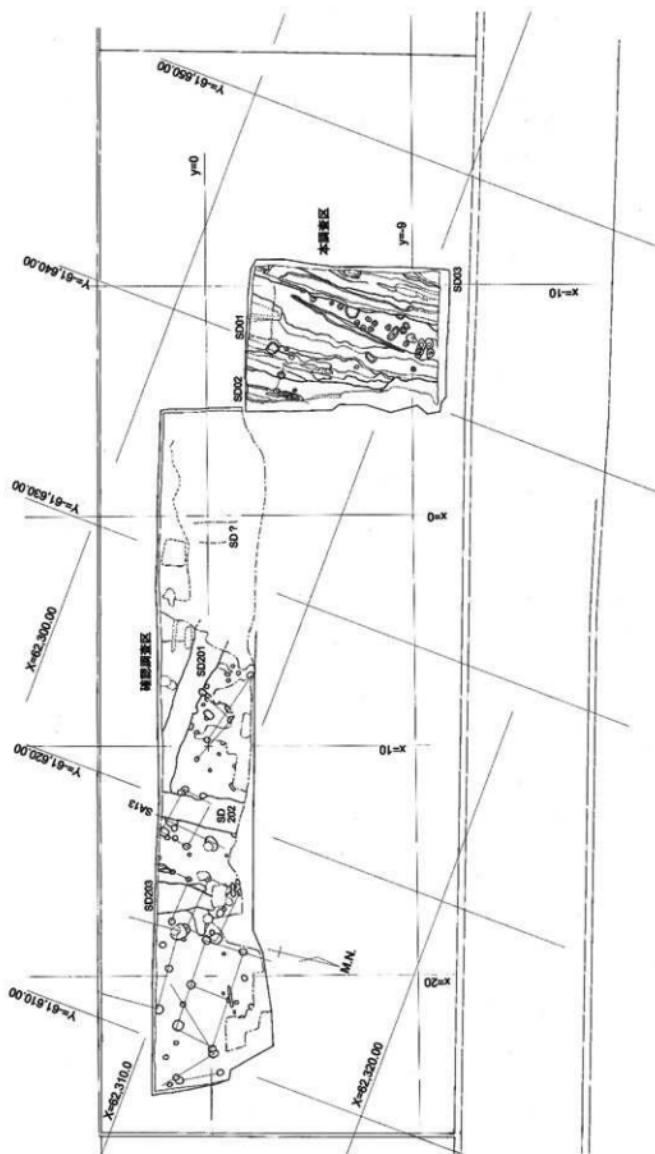


Fig.4 有田221次調査全体図（補助調査含む）(1/200)



Fig.5 有田221次本調査区全体図 (1/80)

であり、SD01底面（大溝1段目）で検出した小溝である（Fig.8）。SD01とSD03を合わせて大溝とする。大溝は底面でSD04・05を検出した1段目と中央の深い部分（SD03）を2段目として分けて理解する。SD01は、まず調査区東側から西に1.0m下がり、「SD01下層」とした凹みに落ち込み、1段目のテラス底面となる。この「SD01下層」とSD04、SD05は、SD01のテラス底面で検出した。SD05は後述のSA01と接して平行する（Fig.9）。SD04は溝中央部のSD03とSD01の一部が埋没後に再掘削された可能性が土層から観察される（Fig.6）。またSD05との直接関係は不明だがSA01を切る。SD04とSD05は大溝全体がある程度埋没した後の再掘削溝であり、大溝1段目底面で検出したため非常に浅い遺存であるが、本来はもう少し深かったと考えられる（Fig.6の24~30層、Fig.7の48,49,51層はSD04）。「SD01下層」は、大溝掘削当初から、大溝1段目下端に形成された凹みと判断される。

は、大情描前当初から、大情1段目
下端に形成された凹みと判断される。

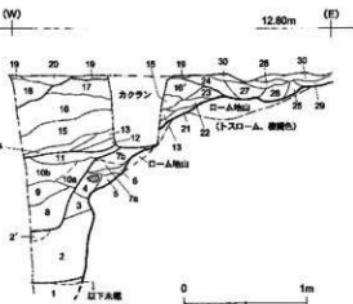


Fig.6 SD03・SD04北側土層断面図 (1/40)

- 27 褐色土+ローム土小ブロック・粒状、黒色土粒含む。20畳よりローム土種量少、24-25
選よりロームブロック(選) 多
28 黒色土、しまりあり。ローム土大ブロック・粒状含む(少) 24畳に近いがやや弱い
29 24畳に近い。根掛むから心配
30 やや根掛むが強め、土少しアリ。ローム粒子含む

表1 SD03・SD04北側土層図 (Fig.6) 注記

第221次調查

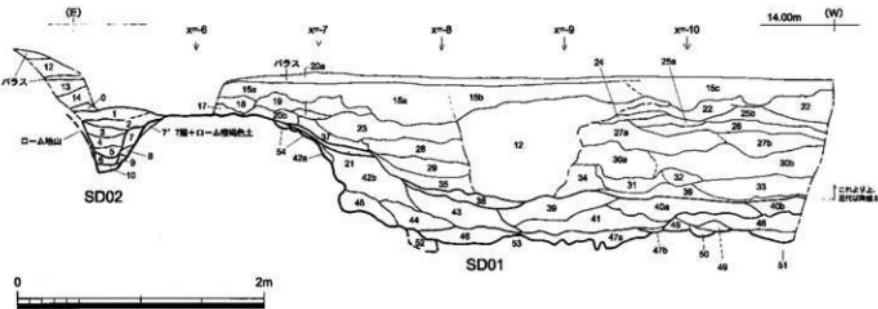


Fig.7 調査区南側壁面SD02, SD01ほか土層断面図 (1/40)

○ (38) 桜色土+ローム土粒子・腐物、1層上り難い
(1~10 SD0002)

- 1 地被性（やぶに性） ローム黒色土
 - 2 土基より高い所、樹木下、灌木下、林内（^{トキ}トキ=しまりあり取り）
（^{トキ}トキ=アツマリ）^{アツマリ}（アツマリ）甘くて硬い、黒色土（にじいろの土）ローム黒色土、セラブロッカ多
 - 3 土基より高い所、たとえば、林内、ローム土上位、プロックなし（ナシ）（アツマリなし）
 - 4 3層以上に（やぶに性）
土基より高い所、たとえば、林内、ローム黒色土プロック少
 - 5 土基より高い所、たとえば、林内、
（アツマリなし）
 - 6 土基より高い所、たとえば、林内、ローム黒色土プロック少
 - 7 地被性（やぶに性）
（3・5・より高い所）
（地被性林内ローム黒色土
プロックなし）^{（トキ）}4種類
 - 8 地被性（やぶに性）
セラブロッカ多
 - 9 地被性（やぶに性）
（ローム黒色土）^{セラブロッカ少}
 - 10 地被性（やぶに性）
（ローム黒色土）^{セラブロッカ多}
 - 11 ローム黒色土、原生黒色土
(10~37層)（原生黒色土=黒土）
 - 12 (原生) 原生黒色土+アース
 - 13 地被性黒土+カラ（ガレギ）多少
 - 14 地被性黒土+カラ（ガレギ）+原生黒色土=原生黒土+カラ
原生黒土+カラ
 - 15 地被性、ガリナ、マリ土
 - 16 ガリナ+コニタ（褐色土色）
 - 17 カクタナ（原生）、地被性、ローム+マサツ+コンクリガラ、
ガリガラ
 - 18 原生黒土+カラ（ガレギ）+原生黒土+カラ+セラブ+少少
 - 19 地被性黒土+原生黒土+原生黒土

表2 調査区南壁面土層図 (Fig.7) 注記 (SD002, SD001, SD003, SD004)

SD05は「SD01下層」を切る可能性が高い。「SD01下層」、SD05・SA01、SD04を検出した大溝1段目は幅3.2m前後のテラス状空間をなすが（掘削当初は「SD01下層」部分が凹む）、大溝の北側延長である133次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集）のSD01の東側立ち上がりにはこのようなテラス状空間はない。しかし溝の反対側ではあるが、大溝南西延長の95次（第139集）の3号溝の西側には、類似するテラス状空間がある。95次3号溝1段目のテラスは、最下部と途中（版築整地面上）の2面で礫敷面が認められ、道路状造構と推定されている。本調査の大溝1段目には礫敷は無いが、下面ないし下層途中の面が一時期道路として利用された可能性がある（後述）。

SD03は、南東側の95次3号溝では薺研堀状、北側の113次ではV字溝状になる大溝の中心部である。他の調査区のような礫の多量廃棄は無かった。調査区壁面近くでの検出のため、掘削が深くなり壁崩落の危険性が生じたため全掘しなかった。大溝1段目レベルから1.5m前後まで掘削した(Fig.6)（調査区南東側の大溝底部レベルからは2.4m前後となる）。しかし確認できた最下層の土層は地山崩落土なので、底面まではあと少しという状況と予想される。断面形は、133次大溝のV字状よりは95次大溝の薺研堀状に近い。土層断面を見ると、埋没途中で一度逆台形状に掘り直されているらしい。

SA01は(Fig.9)、大溝1段目底面でSD04・SD05などとともに検出した。掘削後の状況はピット

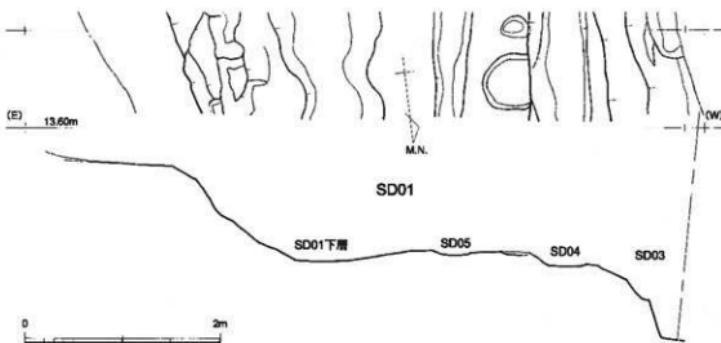


Fig.8 SD01 - SD03ほか断面図 (1/50)

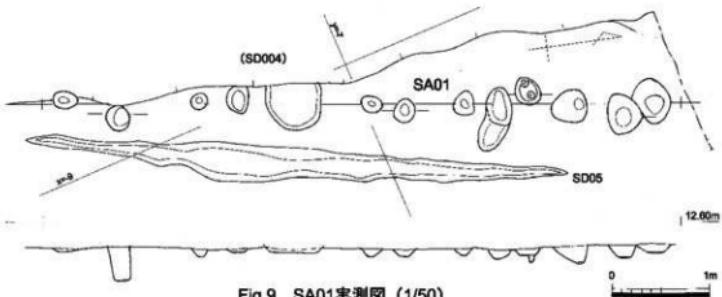


Fig.9 SA01実測図 (1/50)

が並ぶように見えるので「SA（柵門）」としたが、検出当初は溝に直交して横長の土坑が連続するように見えた部分もある(Ph.4)。したがって、このピット列は「波板状遺構」と称される道路遺構にみられる下部構造に類似し、溝の対岸側となるが95次3号溝の大溝1段目に道路遺構が検出されていることを考えると、道路遺構（道路の下部構造遺構）の可能性がある。その場合、SD05は道路側溝の可能性が生じる。道路面自体は確認できなかったが、大溝テラス底面よりやや上のレベル面が想定される。たゞ道路遺構とした場合、北側延長の133次には延びていないことが問題となる（南側188次は削平顯著で不明である）。

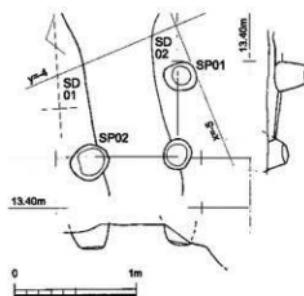
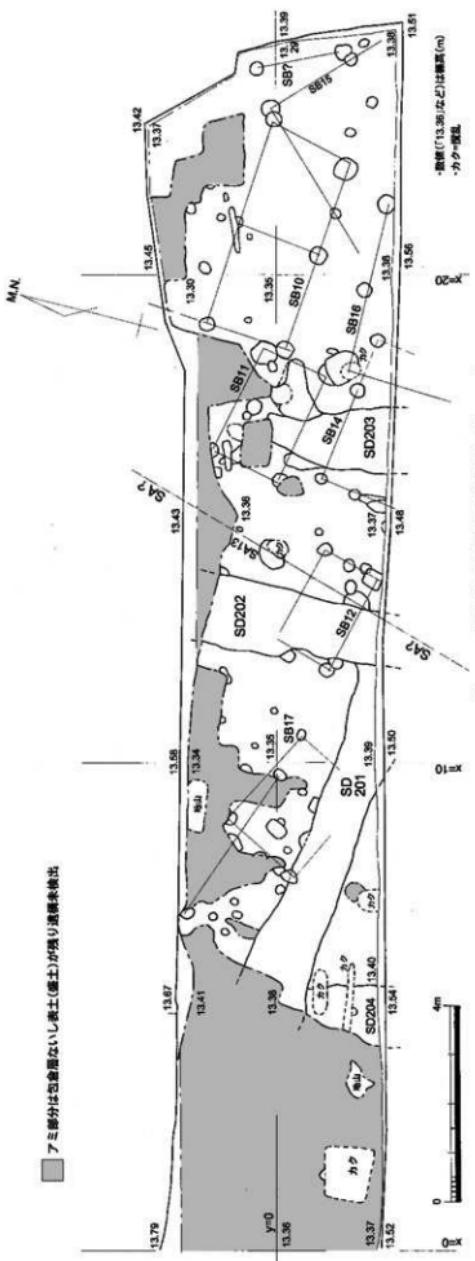


Fig.10 SB01実測図 (1/40)

SD02 (Fig.5、土層断面はFig.7左)

調査区南東で検出。幅70cm、深さ50cm強、断面形が細めの逆台形状を呈する溝である。国土座標北から9度ほど西に振れている。溝の延長は調査区外となるが、北端は溝が途切れるか、東に直角に曲がるようにも見える。屈曲するのであれば、確認調査（後述）のSD201 (Fig.4・5)、181次調査（第574集）のSD004に統く可能性が考えられる。しかし181次の溝は奈良時代とされ、SD02は因化に耐え



る遺物が無いが、瓦質土器壺肩部片や土師質土器鉢破片などがあり、中世後半の可能性が高い。現状では古代の溝ではないとしておく。

SB01 (Fig.10)

調査区南東で検出。東側の2柱穴はSD02の肩部にあるがSD02に切られる。もう一つの柱穴はSD01上段肩部にあり、SD01に切られる。西側は大溝により消失し、北側は調査区外になるため全体像は不明である。SD02が中世と考えられ、柱穴は暗褐色（SP01）と黒褐色（SP01以外）の覆土があったので、古墳時代後期から古代までの時間幅であろう。国土座標北から3度東に触れるが、真北に近く、7~8世紀の遺構である可能性が高い（SP01出土として近世磁器小片があるが、切合いと矛盾しており、調査時の誤りなどの混入とみられる）。

(3) 確認調査 (Fig.11)

「調査の経緯」で述べたように、対象地の一部の遺構確認調査を行った。制約された条件下での遺構検出のため検出作業自体もやや不十分であり、平板測量図のみであるため、周囲調査に比べて記録の精度がやや低いとみられ、厳密な部分ではやや注意を要する。なお、この確認調査時の平面図軸線（任意座標）を生かして本調査部分の座標軸を設定している。遺構検出面については「調査の概要」で記述した。検出遺構は、溝4（～5）条、柱穴多数である。柱穴のいくつかは掘立柱建物や柵列が復元できる（掘削をしていないので出土遺物による同時期性は未検証である）。SB10～12、SA13、SB14～17がある。SA13はほぼ南北正方位に走行し、181次（第574集）のSA003の延長となる。SB12はSA13とはほぼ同方位ながら重複する形になるが、181次検出の方形区

Fig.11 有田221次確認調査部分遺構分布図 (1/100)

第221次調査

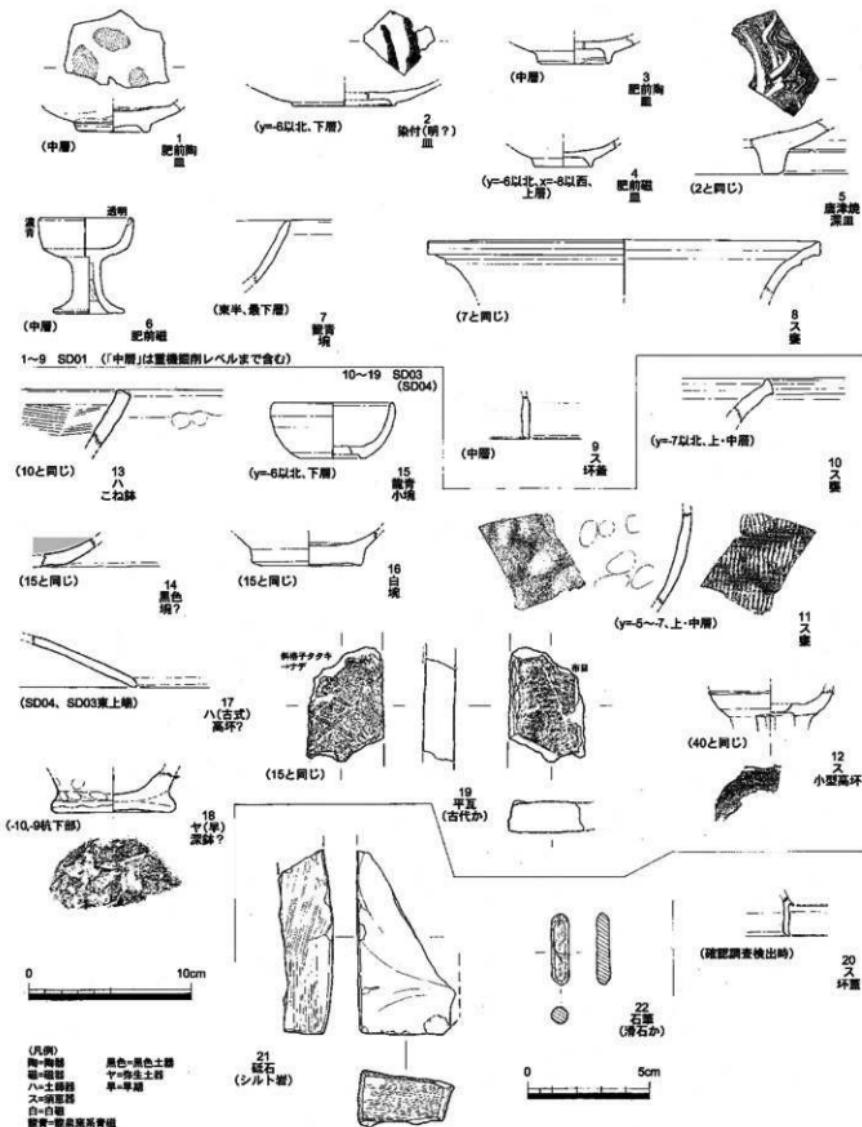


Fig.12 有田221次出土遺物実測図（1）（陶磁器・土器=1/3, 石製品=1/2）

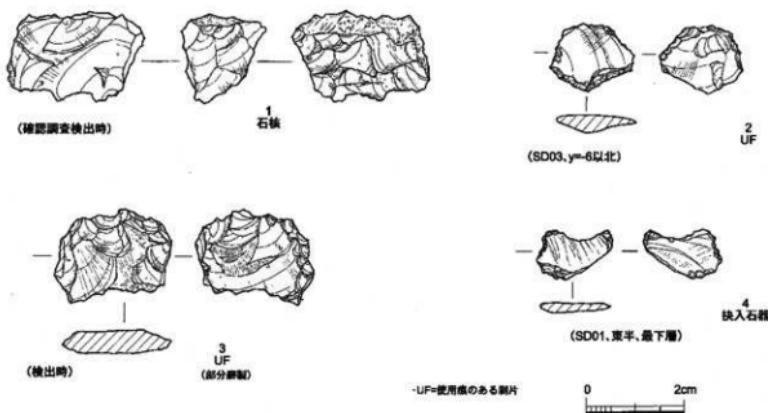


Fig.13 有田221次出土遺物実測図 (2) (黒耀石剥片石器類=1/1)

両に伴う門造構の可能性も考慮される。SB11も近い方位である。SA13、SB11・12は181次報告の「Ⅱ期」における「A群建物」と関連する。次に、SB14とSB10の方位が近い。SB16は若干方位が振れるが、SB10・14とおおむね同方位である。以上は181次報告「Ⅱ期」の「B～D群建物」と関連する。SB15とSB17は他と方位が全く異なり、おそらく中世であろう。溝のうち、SD201は181次SD004に、SD204は同SD001に統く。いずれも181次報告「Ⅱ期」（6世紀～8世紀）の幅内である。181次報告では、後者（南北溝）がやや古い「C群」に、前者（東西溝）が新しい「D群」に伴うとされた。今回の確認調査は、表面確認のみであるがその推定を裏付けている。SD201を切るSD202は、周囲調査では不明である。SD203も同様に延長が不明である（いずれも南側181次には延びない）。これらはおそらく浅く、中世以降の新しい溝と予測する。そのほか確認調査西側では、188次（第608集）のSD02（6～7世紀？）の延長らしき溝（？）も検出している（Fig.3）。

(4) 出土遺物 (Fig.12-13)

パンケース2箱分の遺物が出土したが、大半は溝掘削以前の遺物も含めて大溝SD01・03からの出土である。図示した遺物は、挿図中に出土遺構と遺物の種類を示している。以下、特筆すべき事項を簡潔に記述する。（Fig.12）7の青磁は16世紀後半で大溝掘削時期に近い。2-15は明末（17世紀初頭～前半）の染付と青磁。1-5は17世紀前半～中頃の、3-4は18世紀代の肥前陶磁。6の仏壇器は濃青色瑠璃釉で近代以降か。8～12は6～7世紀の須恵器。12は脚部に透孔がある。14は図では坏のようになっているが、高台付の脚台が剥離しているようである。内黒の黒色土器A類。19は古代の瓦か。17は古式土師器の状開脚高坏か。18は縄文時代晩期～突縄文式期（弥生時代早期）の深鉢底部。外底面の凹凸が激しい。明るい焼成と明瞭な黒斑は弥生土器的。20は6世紀中頃の須恵器坏蓋。（Fig.13）いずれも剥離技術や調整から弥生時代初期（早期～前期）の黒耀石剥片石器と推定される。

5. まとめ

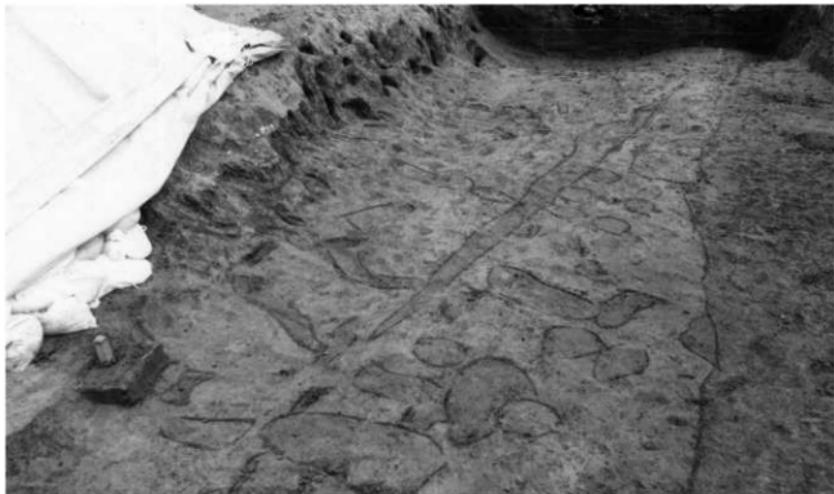
大溝は、①大溝の掘削→②埋没進行（中央SD03とSD01下層まで）→③SD05掘削・SA01形成（道路遺構の可能性）→④埋没→⑤SD04掘削→⑥埋没、という過程が考えられる。周囲調査も参照すると、①は中世末期、②は近世前期、③～⑤は近世前期～後期、⑥は近代に下る可能性がある。



Ph.2 調査区全景（東から；手前はSD02）



Ph.3 調査区全景（北から）



Ph.4 SD01底面遺構検出状況（北から）



Ph.5 SD03北側土層状況（南から）



Ph.6 SD03・SD04北側土層状況（南から）



Ph.7 SD02南側土層状況（北から）



Ph.8 SD01南側土層状況（北から）



Ph.9 確認調査作業状況（北東から）



Ph.10 確認調査遺構検出状況（西から）